

## 「詩歌に込めた原発と命」

2014年07月22日

さいたま市の公民館が「梅雨空に『九条守れ』の女性デモ」という句を「世論が二つに割れる問題で一方の意見だけは載せられない」と掲載しなかった。文芸の領域で、これほどの自主規制がなされているのかと恐怖を感じたが、さいたま公民館への批判が高まっている。当然のことである。

「東京新聞」は自主規制をしないと云わんばかりに、「詩歌に込めた原発と命」と題して、諸々の詩歌を掲載した特集を組んでいる。これらの詩歌から紹介したい。

「サラダ記念日」でベストセラー歌人となった俵万智氏の歌。「遠足のキャンプファイヤーあかあかと持ち帰れない千年のゴミ」、「『おかたづけちゃんとしてから次のことしましょう』という先生の声」。除染した放射性物質の置き場がない。まして、高濃度の核廃棄物は、どこに貯蔵すると言うのか。原発事故の原因が分からず、処理できない状況にあるのに再稼働するという。子どもに躰を教える先生は言葉を失う。

現在、短歌の第一人者である高野公彦氏の歌。「海べりの処々に原発を隠してウランの臭う平成列島」、「原子炉の毒性発電停止して今につぼんは<平静>列島」。過疎の海岸に54基もの原発が作られていたことを、恥ずかしながら知らなかった。政府が、電力会社がいくら作っても損をしないように後押ししたからである。ウランは嗅いでも臭わないだろうが、ウランの臭いを嗅ぎつける感性は持ちたいものである。現在は、稼働している原発は一基もない平静列島である。

大飯原発訴訟では「健康で文化的な最低限度の生活を営む権利を有する」を根拠にし「生命を守り生活を維持する人格権の根幹を具体的に侵害するおそれがある」と再稼働に明確な「ノー」の判決を出した。更に、裁判所に課せられた重要な責務を放棄するなど、司法の姿勢の転換を促す言葉も語っている。

福島からツイッターで作品を発表している和合亮一氏の「孤独」という詩。「原発の爆発の後に 影のようにつきまとう 『孤独死』の三文字 孤独な死という意味 孤独と死という意味 孤独も死もという意味（以下省略）」。原発事故による死者は一人もいないと豪語した女性閣僚がいたが、関連死者は1,500人に達しそうで、まだ増えている状況にある。彼らのうめきは天に届き、地にこだましていよう。

被曝した福島俳人協会福島県支部の方々の句が掲載されている。「麦秋と言えど被曝地人を見ず（鈴木正治・福島市）」。福島原発周辺は無人の町と化している。「罪咎無き猪豚駆除や被曝の地（江井芳郎・南相馬）」。飼う人をなくした豚や牛が放浪している映像は残酷である。「こどもの日甲状腺癌五十人（橋本研二・田村市）」。子どもの甲状腺異常が多発していると聞くと、原発事故との因果関係ははっきりしないという。公害が起こった時、関連はないと聞いたことは数知れない。健康診断の道筋をしっかりと確保しておくべきである。「ナラヌコト・ベカラズと亀鳴きにけり（飯塚恒夫・只見町）」。亀は声を出さだろうか。亀が「ナラヌコト・ベカラズ」と鳴くの聞いたと言う。湯川れい子氏は「いのちの叫び」と題する詩の最後に「ありったけの涙を流して叫び続けよう この美しい日本に、地球に 原発は要らない 絶対に、絶対に要らない！」と歌っている。川内原発再稼働が焦眉の課題になっている。阻止のみである。